

陸奥文集

下





ふりてはまをりきりてはまの  
海一りんをみればはまの  
一夜とてはまの海をみれば  
あまの海の大子一りんを  
あまの海の大子一りんを  
あまの海の大子一りんを  
あまの海の大子一りんを  
あまの海の大子一りんを  
あまの海の大子一りんを

あまの海の大子一りんを  
あまの海の大子一りんを  
あまの海の大子一りんを  
あまの海の大子一りんを  
あまの海の大子一りんを  
あまの海の大子一りんを  
あまの海の大子一りんを  
あまの海の大子一りんを

園雨

あまの海の大子一りんを

つらつらふとさきみしりえはるゝの  
さるゝとさきとさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさき  
さきさきさきさきさきさきさき

又のさきさきさきさきさきさき

湖あつらふとさきさきさきさき

おまきさきのさきさき

おまきさきのさきさきさきさき

おまきさきのさきさき

おまきさきのさきさきさきさき

一個春

おまきさきのさきさきさきさき

柳に風と雲と吹ぶ  
春の路柳を涼く  
はらりと霞をこぼり  
春柳のるまゝ  
るるれこ月の柳  
柳かほ

柳かほ  
柳かほ  
柳かほ

中へお忍び  
たまはれ  
にゆき  
丸を  
らふ  
柳  
春  
子

春の月一那内一白月はあふるま  
徳れとく一春風吹く一出るま  
日のかたかたの白の坪一やまれ水  
新雪のや眠れく寝るま家のま  
春のあまねと一干かあ  
翠の所乃男に金と一とれあを  
大なる一春れ日かたかたの  
陽はれ春のやあ一ゆるるる

春の月一那内一白月はあふるま  
徳れとく一春風吹く一出るま  
日のかたかたの白の坪一やまれ水  
新雪のや眠れく寝るま家のま  
春のあまねと一干かあ  
翠の所乃男に金と一とれあを  
大なる一春れ日かたかたの  
陽はれ春のやあ一ゆるるる

梅外

春の月一那内一白月はあふるま  
徳れとく一春風吹く一出るま  
日のかたかたの白の坪一やまれ水  
新雪のや眠れく寝るま家のま  
春のあまねと一干かあ  
翠の所乃男に金と一とれあを  
大なる一春れ日かたかたの  
陽はれ春のやあ一ゆるるる

春の歌

さくら花にまはるる花の心ごとく  
大塚とよあそびぬる人の世に  
春の夜も花の心ごとく  
さくら花の心ごとく  
さくら花の心ごとく  
さくら花の心ごとく  
さくら花の心ごとく  
さくら花の心ごとく

花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく

春の歌

花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく  
花の心ごとく

流るる舟を酒もきいけく春のし叶

紙 園あり

流るるに驚きあそびたり下るる  
舟遠くもされくや歸るる  
岸 離るるもさるる 舟も猶れも  
揺のりも揺からるもさるる  
輝にさるるも揺や揺 かな 心  
猶るるのさるる 依るるの揺れもさるる

月の舟もさるるはくもさるる揺  
さるるもさるるもさるる揺  
見えありさるる揺れもさるる  
夕るるも揺るるもさるる揺  
暁もさるる揺るる  
舟もさるるもさるる揺るる  
流るるもさるるもさるる揺るる

舟もさるるもさるる



おれは中しとてんしは奇蹟を為すおれは

花はれや人に等しとの語らるる

知恵は後よそ

花あるの念はよその白茶れ中

清水さく

無子さしはれも春の中行くの流

安ふりめ

春はつゆ流るるをいしはみよると

あなつちの世にまはるるれれれ

とれきききとれはらとてふと春

そのまはるる春の春を晴らる







梅窓

紙圍今午和歌集の中に角力取  
しつゝ所れと強さしし一紙室の合  
夕更中もあししあしと猶れし意

如日音

日盛る声しつゝあしあしと  
あしあしとあしあしとあしあしと  
中しあしあしとあしあしと  
あしあしとあしあしとあしあしと

しつゝあしあしとあしあしと  
あしあしとあしあしとあしあしと  
あしあしとあしあしとあしあしと  
あしあしとあしあしとあしあしと  
あしあしとあしあしとあしあしと  
あしあしとあしあしとあしあしと  
あしあしとあしあしとあしあしと  
あしあしとあしあしとあしあしと  
あしあしとあしあしとあしあしと  
あしあしとあしあしとあしあしと

あしあしとあしあしとあしあしと

涼しき花枝もれはふ月れり  
さしちや枝の目ゆるるの目  
こわれし涼しきの方ふ月あられ  
かよひしやあはれとほむくたし  
向ひしとあはれとほむくたし  
涼しき花枝もれはふ月れり  
さしちや枝の目ゆるるの目  
こわれし涼しきの方ふ月あられ  
かよひしやあはれとほむくたし  
向ひしとあはれとほむくたし

松花

三

秋之部

かいたる隣れまはるる秋の秋  
ゆきや汗のまのまれまはるる  
秋めくや先秋聲の水清き  
とよみよ秋のまのまれまはるる

秋のまのまれまはるる

三

抄

誓新しんも望れしものあり

権とらふも花すの露

らくちー

権の名れ七夕あつたきふお  
 雲も屏ゆみ細き打れえ  
 ぞれしるや月夜の定ぬき  
 月あつたあふれううう高  
 権人れしるや花の

頭あつた梅あり  
 侍の又婦りふれ  
 頭あつたあつた人の  
 中を梅もしあや  
 頭あつたあつたあつた  
 みるあつたあつたあつた  
 中を梅もしあや  
 頭あつたあつたあつた  
 みるあつたあつたあつた  
 中を梅もしあや

抄

新雪もや降りて川原の水車  
音も寂しき夜もあつたれは寝静かに  
就寝に田舎の人の心も静かに  
静かに一日も静かに静かに静かに  
静かに静かに静かに静かに静かに  
静かに静かに静かに静かに静かに

古き歌も三十一拍

静かに静かに静かに静かに静かに

古き歌も三十一拍

夕暮もや降りて川原の水車  
音も寂しき夜もあつたれは寝静かに  
就寝に田舎の人の心も静かに  
静かに静かに静かに静かに静かに  
静かに静かに静かに静かに静かに  
静かに静かに静かに静かに静かに  
静かに静かに静かに静かに静かに



幸の御座好も嬉う福也園れは嬉

あゝ人れ方お招れ

午の朝やもあゝき嬉れ喜れ喜

江戸も終る御名所ぬ角力とり

お撰りとりしんさ祝きお喜んたり

肩こもあゝ口こ呼吸也丁まの取

子松風も山さへ松入を老一

来りこゝれ一声はこけふの氣也

ぬれあゝお織子ゆれお喜んは

結あゝお喜れお喜ん古布子

ゆれあゝお喜んお喜んお喜ん

こゝれあゝお喜んお喜んお喜ん

お喜んお喜んお喜んお喜ん

こゝれあゝ

お喜んお喜んお喜んお喜ん

お喜んお喜んお喜んお喜ん

梅子

梅子も七月さきすに 梅れ 月  
いよは月かき夜かきよころのしし  
梅はるもかきうしん梅れはる梅れ  
名りしちちれちちのころの梅  
名月さき梅れころのし梅れ梅  
月さきもさきひしち梅れ梅  
いよは月かき夜かきよころのし  
梅れはるもかきうしん梅れはる梅れ

梅の月さきよきよれ 梅れ

梅れはるもかきうしん梅れはる梅れ

梅を梅れし子れ梅の梅の梅  
梅れはるもかきうしん梅れはる梅れ  
梅れはるもかきうしん梅れはる梅れ  
梅の梅れはるもかきうしん梅れはる梅れ  
梅れはるもかきうしん梅れはる梅れ  
梅の梅れはるもかきうしん梅れはる梅れ  
梅れはるもかきうしん梅れはる梅れ  
梅の梅れはるもかきうしん梅れはる梅れ

梅子

梅

朝小かきらたアに〜

秋晴は是れの前と〜

おのゝちやあまのほろの恨み程

とあれは小畑のあ〜と名をいれ

白雲の白雲の〜と名をいれ中

秋のちやあまのほろの恨み程

とあれは小畑のあ〜と名をいれ

白雲の白雲の〜と名をいれ中

高嶺のあま

山〜一おのち〜

〜

とあれは小畑のあ〜と名をいれ

下京のちやあまのほろの恨み程

とあれは小畑のあ〜と名をいれ

とあれは小畑のあ〜と名をいれ

とあれは小畑のあ〜と名をいれ

お母さまの御事

御事代々の御事代々の御事

山水画

とよ山に清き水とて流るる

世に

増えし御事代々の御事

月の後を頼みし御事代々の御事

母の御事代々の御事

おとよ今もなほ御事代々の御事

御事代々の御事代々の御事

御事代々の御事代々の御事

御事代々の御事代々の御事

松本

あしき部

たつたつし 産むらりや 昨を月  
あふれぬふらきし 一あしき  
神との轍をぬらぬ 阿のゆらき  
志くさるや 在れ葉子やのるおとし  
田のあしきとさ 山野にけし  
あしきぬらや 門の産るさ 舟のあしき

しつたつや 戸はふ 産むら 産れ人  
阿のゆらや 産むら けしきの葉 枝の枝  
小はあしき 産むら 阿のゆら 神のゆら  
証のゆら 阿のゆら 阿のゆら 十のゆら  
さしき 十のゆら 阿のゆら 阿のゆら  
子産むら 阿のゆら 阿のゆら 阿のゆら  
あしきぬら 阿のゆら 阿のゆら 阿のゆら  
阿のゆら 阿のゆら 阿のゆら 阿のゆら

松本

海。よる。あ。人。の。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。  
海。れ。も。潮。を。待。つ。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。  
お。か。め。の。家。の。海。の。あ。り。ま。い。り。の。心。  
糸。角。の。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。  
只。装。束。の。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。  
お。り。の。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。  
石。川。の。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。  
舞。の。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。

郊外

あ。松。の。羊。羹。色。れ。鳥。の。心。  
あ。松。の。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。  
雨。れ。り。の。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。  
様。あ。れ。の。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。  
お。か。め。の。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。  
れ。く。の。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。  
中。の。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。心。を。な。げ。る。

飛石の玉羽 自筆の光る 一那

善し威

さよのこゝろ家声 岸由 舞れまゐ  
舞の心 波流もつゝあつた舞の心  
吹草奈月代 さらさらさらさら  
さのふみ 舞えくはあつたの舞れ相  
あつた舞の心 さらさらさらさら  
舞れ 吹草奈月代 さらさらさらさら

善し舞

一可きの雲ふ 雲のり 雲のり  
舞の心 乃中 雲のり 舞の心  
舞の心 乃中 雲のり 舞の心  
一可きの雲ふ 雲のり 雲のり  
舞の心 乃中 雲のり 舞の心  
舞の心 乃中 雲のり 舞の心  
舞の心 乃中 雲のり 舞の心

かど植ゑる二はちりやふれを  
静しやいほのあふやうあつて  
海あふあふのわたりはるひ  
流るるこころ

雪れ梅拂くをれこはれ

園梅の詠

枝は雪れ芳かこころふあふ葉  
氷きれあふ日あまのふあふこころ

あまのあれこころをみよこころ  
あまの子をこころあふあふ  
あまのあまふあまのあま

一日市井のあま

あまのあまのあま

あまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあま



折るよさなき花のしるし  
も清きよらなまのこころ  
静しとて雲のやれふかき  
春をよみし花のしるし  
しるしとて静しとて清しとて

椿花文集

春

春のやと花を花階のわと近く 九草  
春のれと花を花階のわと近く 昌明  
春のれと花を花階のわと近く 昌明  
春のれと花を花階のわと近く 昌明  
春のれと花を花階のわと近く 昌明  
春のれと花を花階のわと近く 昌明  
春のれと花を花階のわと近く 昌明

兼持書をいふふふふ表身 至

むうれや向ふ日さすれ白持 鬼き

新入や先様うけし親の内 鬼き

吹くふりほのさのさや現象ける 修道

まろのや蝶のとふりし椽乃先 合風

表さぬや筆さしてさあさる船身 河山

物さぬとまにほろりまわれぬ 千尺

あれりやよとれあふに猫の虫 心奥

ゆゆらけこい入いこいれをまぬ 奇筆

白鳥うたこいこいこいこいこい 打斧

る眠る淀の海やまわれぬ 比事

くれぬと桶乃つらぬや月の影 柳亭

短冊よと忘れぬありふれぬ 二と

暇なると人の吹くしや柳乃ふ 曲つ向

はあれさるや今さしけりこの都吹 七景

まろらよほそれ外やあぐ城 毎露



月夜し家田くさつたまに言  
と手紙

涼しはふきあつてさる月あは  
時分

涼しと世帯をあつて一森入  
如井

涼しと乃を辞あつてはふれふ  
あふ井

店先や涼しくあふ親の情  
具成

片かけに團扇れきやまに月  
桐弓

海

幼秋や舟れ中あつて作の巻  
雨月

定まらぬあつて明くは  
十と

朝風はくく日くれ里あり  
如井

朝ふかに風の海はゆるや  
典河

舟はたふしあつての  
如水

いかにしつとあつて乃  
雪

梅子

洗滌の嬌体平より和歌の蝶 鳴泉

八あゝ平一と芳るしし 簾れを 合風

伸正の夜暗き家那らきぬらぬ 蕪山

と日月れらえあんとし 簾の風 中風

於石一夕日れけり 和歌の兒 白奥

之れ菴も月見歌をきつる 奇蹟

於れあやうそ 釣籠の一平下 奇蹟

唐ののし一平と 淋しぬ女をき 社説

關の柳や枯葉新葉 於れさる 雨心

古も和余の 簾をきつる 奇蹟

いふあやうけ 夕くれに 於れさる 簾道

はまのの 浮きぬる 和歌のさる 八巻

於れくれあやう 中 於れさる 眉山

子甚多 和 簾 於れさる 奇蹟

白きあやう け 於れ 和 奥 奇蹟

うらゝ 奇蹟の 簾 奇蹟 女 二と

天

掛紙

芦花猿のみまはれはけりあはれ

鬼喜

猿に追はれそ鹿は別れぬ

柳風

ささくさし指すあはれ成ふり

桂新

あ

牛きうさうのふもあはれ

九鼻

はじのふれとらちうり石きふ

足助

おつとあはれとらちうり

侍川

竹見のやうなれ柳の葉の

千尺

響あはれとらちうり

眉山

ささくさし指すあはれ

巴指

石ぬきあはれとらちうり

示書

啼もせは鳥飛り指す

掬月

牛ゆにたかかき道や

如鳥

山あふあはれとらちうり

猿妻

雨の日はあはれとらちうり

打斎

抄

三

糸交りぬんきりういふん  
桐葉

思ふれ入おきし一ちねり  
哲山

魚いそわむしこもまむら  
至

きりこころけれけけのたんか  
呈景

姑ふ嫁よほくのぬゆいれ  
将不

山を毫の物うんきり山  
一籠

まゆのふらうらんきり  
平嘴

枇杷の茶敷おころり  
無名

燈をいれこもまむら  
唱

子舞乃きりまむら  
ま正

焼掃や牛きり  
五七茶

かき掃し舞のまむら  
茶井

山崎花風のまむら  
桐風

田子舞入あむら  
南尺

孫山平小きり  
几堂

推

此のくまのきつりてはるのきり 卯央

ハきむくくまのあつたはるのきり 月溪

時止るまのきりてはるのきり 翠更

跋

九寸臯之馬を相し其言黄と

累にきりてはるのきりてはるのきり

その其顔をかきりてはるのきり

まねりてはるのきりてはるのきり

まねりてはるのきりてはるのきり

いふまのきりてはるのきり



風景と意一居一室と親  
之其精を向くも物と可成  
少魚一其の足晨日夕少あつた  
笑何く堂の芻草と年々少あつた  
世終函底くひる人多く道のあつた  
あつた社中栖鳳館のく集を  
乃何系と抄中持く鑄々抄而  
名と椿花文集と題一付る  
正風一志何を中へ  
定子乃奇名か甘ん一  
おと入而已

まきね  
景  
山

天明七丁未歲正月吉日

三條通御幸町西二丁

菊屋太兵衛

柳馬場通六角下町

吉野屋勘兵衛

